「陪読」する中国農村女性の生活戦略

鄭　　怡

1　はじめに

近年、中国では農村女性が「陪読」（Peidu ペイデュー）する現象が雨後の筍のごとく誕生し、社会的な関心を大いに引き寄せている。本稿での「陪読」とは、農村家庭の大人、通常は母親が子どもの教育のために、地方都市に一時的に移住し、そこで子どもの身の回りの世話をすることである。中国最大の学術データベース CNKI 知網で「陪読」というキーワードで検索すると、「陪読」に関する文章数は年々増加する傾向にあることがわかった。以前の形態の「陪読」と比べ、現在、一部の農村では、「陪読」が新しい傾向を呈している。具体的には、「陪読ママ」の年齢が若くなり、「陪読」の対象である子どもの学年が低くなり（以前は高校生が中心だった）、「陪読」のために農村部から都市部への移動距離が短くなった、などの傾向が挙げられる（唐ほか 2017）。社会関係資本や経済資本に欠けた家庭にとっての子どもの学歴の重要性が街頭やインターネット上で吹き荒れ、中国全土を席捲してきた。

「陪読」現象について、学術界で最も注目されているのは子どもに与える影響である。たとえば、「陪読」することが子どもの成績、性格の形成、親子関係にどのような影響を与えるのかについての研究が数多くみられる（韓 2019; 楊 2019; 李 2022）。しかし、多くの研究では子どもに「陪読」する人々の中心は農村女性であるという点が見落とされている。

唐佳・梁謹恋・穆莉萍（2017）は「陪読」が「陪読」ママに与える影響を分析した。唐ら（2017）によれば、プラスの影響は 1）子どもの変化、2）教育経験の蓄積、3）親からの賞賛の獲得、4）周囲の羨望、であり、マイナスの影響は 1）経済的な決定権は持つものの、お金を使うのは不便である点、2）職業中断と就職資本（年齢）の喪失、3）空き時間の無駄使い、4）自己閉鎖、社会的付き合いの減少、である。

しかし、「陪読」することが農村女性の実質的なエンパワーメントにつながっているか否か、「陪読」することが家庭内におけるジェンダー役割をどのように変化させるかを検討する先行研究は管見の限り見当たらない。そこで、本研究では「陪読」農村女性を対象に、

彼女たちの語りから、(1)「陪読」することによって女性たちはエンパワーされるか、ディスエンパワーされるか、(2)「陪読」することは伝統的な性別役割を強化するのか、それとも女性に嫁ぎ先での従属的な性別役割から解放される機会を提供するのかという二つの点を検討する。

2 先行研究

教育重視な母親像は東アジア、東南アジアの諸地域でもみられる。海外教育移住の文脈では、「宇宙飛行士家族」という西側諸国で出現した独特の形態の移住家族がある（Ho et al. 1997）。「宇宙飛行士家族」とは、特定の目的を達成するために家族成員が別々の国に分かれて居住する家族を指す（Jeon 2008）。具体的には、多くの場合母親が母国での仕事をやめ、子どもの教育のために子どもを連れて西側の先進国に教育移住し、父親が家族を経済的に支えるために母国に残り働き続ける（Jeon 2008）。母親と子どもたちは通常、意図した結果が達成された後、出身地域に戻り、残りの家族と再会することを計画している（Jeon 2008）。「宇宙飛行士家族」というような形態の移住家族は主に香港、韓国、台湾などが送り出し地域として、ニュージーランド、オーストラリア、カナダ、アメリカなど西側諸国が受け入れ地域として発生している（Waters 2002; Chiang 2004, 2008; Jeon 2008）。

「宇宙飛行士家族」のような移住形態が教育移住に同伴する女性に与える影響について数多くの研究者によって分析されてきた。H. Jeon（2008）は宇宙飛行士の家族における韓国人の母親の主観的な経験と、彼女たちの主観がニュージーランド滞在中にどのように構成されるのかに焦点を当て分析を行った。H. Jeon（2008）によると、英語の優位性や西洋文化の支配的な地位によって、教育移住に同伴する韓国人の母親は隔絶と孤独で無力感を感じ、ニュージーランド人と非対称的な関係にあることに気づいた。教育移住の最初の段階で、このような非対称的な権力関係は、女性にとっては苦痛であり、疎外され、孤立され、無力化されるものとして経験される（Jeon 2008）。しかし、このような非対称的な権力関係がもたらした無力感は、ニュージーランドに住む韓国人宇宙飛行士家族の母親にとって持続的なものではない（Jeon 2008）。彼女たちは異国において社会適応するなかで、新しい仕事や新しい人間関係に対応するなかで、新しい主観性、つまり新しい文脈において有能で独立した自分を構築し、韓国人として母親としての身分を自分自身で再帰的に解釈することができた（Jeon 2008）。海外教育移住で起こった変化により、女性たちは主観を異なるものに構築し、また自分自身をより柔軟で力強いものに構築する機会に開かれるようになった（Jeon 2008）。具体的な変化としては、西洋の知識と言語を扱いやすい

ものと考えること、一人でいることを自分の可能性を探求し試す機会として捉えること、夫の家族とのそれまで硬直的だった関係をより柔軟なものとして経験するようになったこと、などの例が挙げられる（Jeon 2008）。

J. L. Waters（2002）は香港と台湾からカナダに教育移住した中高所得世帯の 24 人の女性の個人的な物語を通して、孤独な女性（いわゆる宇宙飛行士の妻）の生活の現実と移住の意味を解明した。J. L. Waters（2002）によると、教育移住した最初の段階で、退屈や孤独、恐怖を感じ、家に閉じこもるに至った女性がいたことがわかった。インタビューに応じた人全員にとって、宇宙飛行士の妻としての最初の 1 年は困難な時期であったが、このような困難な経験は、移住経験の中で比較的に短期間のものにすぎなかった（Waters 2002）。女性の抑圧感は、彼女たちが周囲の環境に慣れ、友人を作り、言語能力を向上させ、その結果として共感力が高まるにつれて、時間の経過とともに徐々に薄まった（Waters 2002）。彼女たちは自分たちの状況を、香港や台湾での非常にストレスが多く厳しい生活からの歓迎すべき変化として、また親戚（特に義母）から受ける社会的プレッシャーからの喜ばれるべき解放として、新たな観点から認識し始めた（Waters 2002）。

N. L. H. Chiang（2008）は 2005 年から 2006 年にかけて、スノーボールサンプリングによる半構造化アンケートを使用して 30 人の台湾からカナダに教育移住した女性にインタビューした。N. L. H. Chiang（2008）は宇宙飛行士の妻たちの主観的な経験を内部関係者の視点から調べ、適応プロセスに対する女性たちの自己評価に焦点を当て考察を行った。その結果、教育移住の影響として、国境を越えた家族生活により、ほとんどの女性は母国で確立された職業上の道を維持することが困難になっており、移住と国境を越えた取り決めにより、一部の妻は経済的援助を夫にさらに依存するようになったということが分かった（Chiang 2008）。しかし、同時に、妻が世帯主となり、自主性と決定権を行使する機会も提供されたということも分かった（Chee 2005: 196）。N. L. H. Chiang（2004, 2008）はオーストラレーシアとカナダで、台湾の宗教団体は女性移民に重要な居場所を提供し、彼女たちが自分自身を発見し、台湾から得た社会関係資本を活用し、新しい友人に出会う機会を増やし、新しい国でより充実した生活を送れるように支援してきたと指摘している。

海外教育移住する中高所得層の女性は新しい社会で「孤独な母親」になったときにどのように様々な困難に対処し、かつ困難を乗り越えた後に女性の主体性や主観はどう変わるか、またどのような状況下で女性は不利な立場に置かれたり、エンパワーされたりするかについての研究が蓄積されてきた（Waters 2002; Chiang 2004, 2008; Chee 2005; Jeon 2008）。従来の研究は海外教育移住にスポットライトを当て、その体験が上流階層・中間

階層に属する女性たちにとって最終的に肯定的かつ有意義な部分が多いという結論が導かれたが、経済的・社会的・文化的に恵まれていない、低所得層の家庭における国内教育移住に同伴する母親の移住経験に関しては充分に視点が向けられていない現状がある。そこで、本研究では、階層や地域格差という重要な視点を視野に入れ、低所得層の家庭の行う教育移住に同伴する母親に焦点をあて、(1) 国内教育移住に同伴する母親はどのような状況下でエンパワーされたり、ディスエンパワーされたりするのか、(2) 国内教育移住は伝統的な性別役割を強化するのか、それとも女性に嫁ぎ先での従属的な性別役割から解放される機会を提供するのか、という二点を検討する。

3　調査概要

3-1　調査対象地の概況

本研究の調査協力者は全員が江西省の出身で夫とともに農村戸籍を持っており、「陪読」を過去に経験したか、あるいは調査時点において経験していた人々である。今回の調査協力者は知り合いの紹介から始まり、スノーボールサンプリングで探していった。調査対象者の協力を獲得する可能性と容易性を考慮に入れ、調査目的地を江西省に限定した。江西省統計局は 2021 年に「省統計局解読江西省第七次全国人口普査主要数据」（省統計局の江西省第 7 回人口調査の主要データに関する解釈）を発表した。江西省第 7 回人口調査によると、江西省全省の永住者のうち、都市の永住人口は約 2,731 万人で、2010 年に比べて 767 万人増加し、農村の永住人口は約 1,787 万人で、2010 年に比べて 705 万人減少した。2010 年から 2020 年までの 10 年間、都市部の常住人口は農村部の常住人口を上回り、ますます多くの農村移住労働力が「村民」から「市民」となった。また人と戸籍の分離は日増しに常態化し、省内における流動人口は倍増している。特に、農村から都市への一時的な移動が目立つ。

3-2　調査方法

オンラインでの半構造化インタビューを通して中国江西省農村地域の「陪読」女性たちからの聞き取りによって、上述した問いを解き明かしていく。半構造化インタビューは、調査したい内容を効率的に深掘りできるというメリットがある。コロナ禍の期間中、オンラインでの半構造インタビューによって費用対効果の高い調査が期待できる。

3-3　調査実施詳細

2022年4月から6月にかけてオンラインで1回目の半構造化インタビューを行い、同年の8月にオンラインで一部の調査協力者を対象に、追加インタビューを実施した。調査協力者は40代、50代の人々であり、彼女らも、またその夫たちも全員が農村部の出身である。インタビュー時間は一人につき合計1時間程度から5時間程度までで、時間には幅がある。また、インタビューの行われた回数は1回から4回までである。

インフォーマントの基本情報をまとめたものが表1である。

表1　調査協力者の基本情報

仮名	年齢	身分	学歴	「陪読」歴	子どもの数	「陪読」される子どもの性別/数	「陪読」前の職業	夫の年齢	夫の職業	夫の収入(コロナ禍前)	「陪読」される子どもの動向
Aさん	49歳	母親	中卒	6年	2	男子1	専業主婦	50歳	建設労働者	1万元くらい/月	大学に進学
Bさん	49歳	母親	小卒	今まで7年まだ進行中	3	女子2/男子1	出稼ぎ	50歳	建設労働者	8千元→1万元/月	長女：大学に進学　下の子：受験勉強中
Cさん	46歳	母親	小4卒	1年	3	男子1/女子1	専業主婦	47歳	大工	8千元→1万元/月	長男：大学に進学　下の子：受験勉強中
Dさん	47歳	母親	中卒	4ヶ月	2	女子1	自営業	46歳	農村末端の大衆自治組織の役員	秘密	大学に受からず、就職
Eさん	45歳	母親	小卒	6年	2	男子1	専業主婦	47歳	塗装工	8千元→1万元	大学に進学
Fさん	47歳	母親	高1前期退学	6年	2	女子1/男子1	専業主婦	48歳	薬剤師	10万元くらい/年	女子も男子も大学に進学
Gさん	55歳	母親	小卒	6年	3	男子1	専業主婦	65歳	清掃員	3千元/月	大学に進学
Hさん	51歳	母親	小4卒	1年	3	男子1	専業主婦	50歳	自動車整備員	4千元/月	大学に進学

調査協力者の多くは低学歴で、経済的にそれほど裕福ではない。姑の高齢などにより子どもの世話を任せられる対象が存在しないため、彼女たちの多くは「陪読」前に専業主婦をしていた。また、新型コロナウイルスの影響もあり、彼女たちの家庭の収入は以前に比べ減少している場合が多かった。

4　インフォーマントたちの語りについての分析

4-1　都市適応の初期段階：人間関係の紡ぎ出し

インフォーマントたちは毎日の買い物をきっかけに市場で交友関係を築くこともあれば、麻雀室や整体院で友達を作ることもある。月日が重なっていく中で、知らずのうちに、インフォーマントたちは近隣の「陪読」ママと仲良くなっている。朝に一緒に市場へ買い物に行き、午後は雑談、夕方には一緒に散歩なり広場でのダンスなどをする。彼女たちの交際圏は実は狭いと考えられる。多くの場合、彼女たちは近くに住んでいる「陪読」友としか付き合わない。子どもの学校に住んでいたインフォーマントたちは学校の学生と付き合う時間が多かった。学校の外に出られる時には、以前に知り合った学校の外で「陪読」している知り合いとどこかへ観光へ出かけたりするが、そのような時間は非常に限られて

いる。また、A さんの場合は学校寮の管理をしており、学生に対しては重い責任を持っているため、外出すること自体がめったにない。学校の外に住んでいる同郷人と世間話をするのが、唯一の学校外での交際活動である。

「『陪読』友との雑談は普通どんな内容でしょうか」という筆者の質問に対して返ってきた典型的な答えは次のようなものであった。

A さん：なんでもしゃべる。思いついたことを勝手にしゃべる。たとえば、子どもの性格や成績、学校でのパフォーマンス。今日はどんな料理を作るのか。最近はどんな美味しい料理を試したのか、昨日息子に殴られたとか。愉快なこと、不愉快なこと、色々だ。とても悲しいことでも互いに耳を傾けたりする（2022 年 5 月 14 日）。

C さん：子どもの成績や性格、学校などについてよく話している。あるいは今日何の料理を作るのかとか（2022 年 5 月 16 日）。

D さん：やっている仕事の給料が少ない、やりがいがないと愚痴をこぼしたりする。秋に山の中へ果物摘みに行くみたいなイベントの打ち合わせとか（2022 年 5 月 27 日）。

E さん：普通に何でもしゃべる。日常生活における些細なこととか（2022 年 5 月 28 日）。

G さん：やはり子どものこと、学校のこと、家族のことなどについてよく話していた（2022 年 5 月 28 日）。

「陪読」は実は二つの逆方向のベクトルとして機能する可能性があることが調査対象者の話から浮かび上がってきた。「陪読」の対象者である子どもは皆が「陪読」の人に感謝の気持ちを抱いているわけではない。「陪読」の人を憎んだり、嫌悪の気持ちで彼女たちを身体的であろうと精神的であろうと傷つけたりすることもみられた。

「陪読」をしているという状況を共有している彼女たちは、互いの感情を理解し合い、子どもの成績について競って見栄を張るのではなく互いに親切な感情を抱いて平和に接している。「陪読ママ」、さらには女性としての苦難を語り合い、理解し合う。彼女たちは「陪読」期間中、互いに支えあっているのである。特に、子どもに暴力をふるわれるような惨めな経験は、彼女たちが相互理解や共感の土壌を育む重要な契機となっていた。

インフォーマントたちが移住先の人たちと付き合いを持つことは稀である。一方で、同じ農村部からの「陪読」友と交際する時間は多い。都市部での余所者という身分が共通しており、「陪読」農村女性のネットワークを彼女たちは作り出している。そのネットワークの中で、彼女たちは、喜怒哀楽をためらいなく打ち明け、自分と気の合った人と親友になっている。しかも、そのような親密な関係は「陪読」終了後にも続くことが多い。

他愛のない雑談や余暇の活動は、「陪読」する農村女性たちが移住先での孤立から脱却し徐々に主体性と集合性を築いていく手助けとなった。彼女たちは互いの名前すら知らない状態から、一緒にテレビを見たり、料理をシェアしたり、悩みを打ち明け合ったりし、連帯感を育んでいく。余暇を過ごす居住地ごとの集まり場所が、インフォーマントたちにとっての一時的な安息の地として働いているのである。こういった非親族関係やくだけた友人関係はインフォーマントたちの生活に彩りを添え、孤独感を軽減していることがわかった。

4-2　都市適応の進展段階：移住先に対する感情

一部のインフォーマントは移住先で家を購入することを今後の目標としていた。H さんは移住先 L 市で一年間暮らしたことがある。L 市が嫁ぎ先より勝っているところを次のように筆者に述べていた。

> L 市は自然が豊かでありながら、蚊があんまりいない。インフラが完備されており、交通や医療が便利である。しかも、物価が安い。たとえば、牛肉とかの値段がとても手頃で買いやすい。なによりも重要なのは、L 市は古くから「才子の里」と言われ、文芸が発達し、人の成長と発展に優しい都市である。L 市では毎年中国のトップツーの大学に受かる人が多く、教育環境が非常に整っている都市である。夕方から、歌を歌う人、芝居をする人、広場でダンスをする人、太極拳を練習する人、街には人がいっぱいで賑やかである（2022 年 6 月 7 日）。

H さんは L 市で定年退職した元教師の女性と友達になることができた。その女性は H さんを市政府や、公園、広場、博物館、劇場などさまざまな場所に遊びに連れて行っていた。「せっかく遠くから L 市に来たから、L 市の名所旧跡を観光せずに帰ったら損だよ。子どものことに力を注ぐばかりではなく、自分の生活も持たないと」と H さんは L 市の友人に誘われたことがある。

H さんは L 市で作った友達と今でも連絡を取っている。祝日に L 市の友人とお祝いの言葉を交わしたりする。L 市で持ち家を購入して老後生活を享受したいと、H さんは夫に切実な願いとしてたびたび伝えている。H さんは L 市での生活を通じて嫁ぎ先のさまざまな面における発展不足を感じた。L 市で作った友人の影響で、無自覚のうちに生活がより多彩になり、「子どものために生きてきた自分はこれからもっと自分のために生きていくべきだ」というような観念的な変化もみられるようになった。にもかかわらず、現実的に

H さんは「陪読」後に長女の世話をするためにL市に住み続けられず、上海に移転してスーパーで働きながら長女の世話をするようになった。

G さんは嫁ぎ先のある都市からずっと離れた江西省の一番大きな都市N市で三年間「陪読」したことがある。息子は数学の才能が豊かで、N市で一番良い高校の数学オリンピッククラスに選抜された。G さんは息子のおかげで、良い意味で特別扱いされ、息子の入っていた高校で仕事をできた。G さんは仕事で息子の高校に住んでおり、ほぼ毎日学生と同じ空間で暮らしていた。

学校で仕事していたから、余暇の場合は学校の運動場とかで散策したりしていた。学生たちの元気ぶりを見ると、ついに自分の学生時代のことを思い出してしまう。活力たっぷりの青春に感染され、毎日若くて積極的なメンタリティーで物事を見ることができていた（2022 年 5 月 28 日）。

G さんは息子が通っていた高校の学生を非常に高く評価している。N市の学生は学業のみではなく、各種の運動や芸術などにも精通しており、性格が明るく外向的で陽気である。いわゆる徳育・知育・体育のすべての面で優れた学生たちであると G さんは考えていた。もっと早く子どもをN市に連れて、良い教育を受けさせるべきだったと後悔している。嫁ぎ先の学校では全国数学オリンピック向けの課程がなくて息子の数学における才能が無駄遣いされていた」と G さんはインタビュー中に何度も嘆いていた。

G さんは仕事の関係で、ほとんど校外に行く時間がない。たまに同郷の「陪読」ママと校外で言葉を交わしたことはあるが、H さんのように都市の隅々まで観光したことはない。N市で生まれ育った友人がおらず、G さんは自分が「余所者」という感じを抱いていたが、N市を好んだのはN市の学校の雰囲気が良いためである。子どもが小さいころから良い教育を受けさせることができなかったことへの後悔の気持ちや後ろめたさが、聞き取りの中では溢れていた。

G さんはN市の文化や教育の環境を賞賛しつつも、N市は嫁ぎ先から距離があるため定住したくないと述べている。

N市は確かに子どもの成長に優しい都市だと思うが、私のような中年層の余所者には優しい都市ではないかな。私は「陪読」ではじめてN市に行ったから、すごく疎外感を感じていた。言葉や、習慣など。息子のための「陪読」の三年間、私が毎日「陪読」が終わるまでの日数を数えていた。早く「陪読」を終え、早く嫁ぎ先に帰りたかった（2022

年5月28日)。

Gさんが娘の「陪読」をしていた時にはそれほど家から離れていなかったため、「陪読」先に住むにしろ、嫁ぎ先に住むにしろ、家のことをこなすのにはそれほど手間がかからなかった。しかし、息子の「陪読」をしていた際には嫁ぎ先からかなり離れることとなり、Gさんは不便を覚え、ホームシックや寂しさも強く感じたという。

Hさんは一家で都市部に移住したため、嫁ぎ先に親しい家族がおらず「陪読」が終わった後にも都市部に住み続けていたが、Hさん以外のインフォーマントたちは嫁ぎ先にまだ家族がいるため、「陪読」後に全員嫁ぎ先に帰っていた。

今回のインフォーマントたちの語りから見ると、インフォーマントたちは嫁ぎ先に近いほど「陪読」先で安心して楽しく住む傾向があるということがわかった。Gさん以外のインフォーマントたちは全員嫁ぎ先に近い都市部で「陪読」していた（している）ため、あまりホームシックや寂しさを感じていないと語っている。それとは対照的に、Gさんは嫁ぎ先からずっと離れた都市部で「陪読」していたから、非常に孤独感を感じていたと話していた。インフォーマントたちは、「陪読」先が嫁ぎ先に近いほど、彼女たちの家族たちも含めて、行き来するのに時間面にせよ、金銭面にせよ、省くことができると予想されるからである。それに、「陪読」先が嫁ぎ先と離れるほど、「陪読」農村女性は不安と孤独と恐怖に怯えつつただ一人で子育てに対峙する状況に追い込まれやすいことがうかがえる。

海外教育移住する女性と大きく異なり、農村部の女性は移住先で相対的に自由な生活を享受しながら、農村部にいる親族との感情的なつながりを重視しており、特に親世代の健康状態や生活状況に気を配っている。移住先が嫁ぎ先や実家に遠いほど、女性たちはホームシックや孤独感、疎外感を覚えやすくなる。

「陪読」生活が楽しくても「陪読」後に農村部に帰りたい理由として、経済的な理由（移住先の家賃や物価が高い)、思考様式的な理由（価値観的にまだ家族主義の思想様式が根強い)、制度的な理由（農村女性は独自の土地を持っておらず、父親や夫、息子の誰かに依存しがちである）などが挙げられる。

4-3 「陪読」期間中の夫婦関係

先述したように、インフォーマントたちは「陪読」する前から夫と離れて暮らす場合が多かった。夫が出稼ぎに行っていない場合は嫁ぎ先に住んでおり、母親に世話をしてもらうか、自分で身の回りの世話をするかという二つのパターンがある。遠方へ出稼ぎに行っていない夫は嫁ぎ先の付近で仕事に携わっており、インフォーマントたちの移住先と嫁ぎ

先を行き来している。たとえば、休日の子どもの送り迎えや定期的なお見舞いなどで、同じ省にいる場合は、夫婦間の交流がずっと頻繁になる。それに対して、ほかの省へ出稼ぎに出ている夫は、妻と一緒に過ごす機会が少ない。A さん、C さん、D さん、F さんの四人の夫は全員ほかの省で働いている。彼女たちの代表的な語りをまず整理する。

「『陪読』の時、夫との連絡はどういう形で取っていますか」という筆者の質問に対して、概ね「電話や、ウィーチャットでのビデオ通話などを通して連絡している」という答えを得られた。通信技術の発展が潤滑油の役割を果たし、インフォーマントたちと夫との関係をある程度良好に保っている。「夫とは年にどのぐらいの頻度で会っていますか」という疑問に、彼女たちは口を揃え、「あまり会っていない。端午節や、清明節、春節みたいな祝日に、夫が嫁ぎ先に帰る時にしか会っていない」と語っている。

C さんは夫の人格に非常に自信を持っており、夫のことを信頼している。C さんの話によると、彼女と夫はより平等な関係にあり、長い間仲良く付き合っている。しかし、彼女とのインタビューから、C さんは夫より高い家庭地位を得られていることが推察できる。結婚前には夫を振るという考えがあったが、夫に泣いて引き留められたためその考えを諦めた。その後は、結婚生活で夫の性質が良いことを確認しつつ、順風満帆とはいかずとも円滑な家庭関係を夫と提携して築き、たくさんの障壁を乗り越えてきたという。

C さんは、弱気な夫が他人に利用されることを心配している。当初夫を手放さなかったことの恩恵のようなものが、C さんを夫婦間でのやや強い地位に置いていると C さんは語っている。「陪読」期間中も完全に夫の収入を把握しており、「陪読」前に培った堅固な夫婦関係が互いへの懐疑を抑制し、夫婦間の関係の良好さおよび夫の性格が C さんにある自信の一番の源である。

C さんも夫婦が別々に暮らすことの不便を次のように述べている。

> 夫がいると、家の電灯が壊れたら、夫が簡単に電球を交換してくれるし、私も夫のために料理を作れるし。夫と別れていると、いろいろな不便を感じちゃう。特に体力が求められる時には、「夫がそばにいたらいいな」と思っちゃう。夫がいないから、今の自分は体力が求められるいろいろな仕事をできるようになった。夫との別々の暮らしにも慣れてきた（2022 年 8 月 3 日）。

C さんは「陪読」しているうちに、生活上の様々な技能、たとえば、電球の交換や電機の修理などを身につけるようになった。同時に、フレキシブル・ワークと子どもの世話との両立もできるようになった

たまに離婚したくて家のことを全部捨てたく思う。しかし、そうすると、子どもがかわいそうでなかなか家のこと捨てられずにいる（2022年8月3日）。

Cさんの話によると、婚姻生活はいつも楽しいわけではない。夫と揉める時に、子どもの世話で辛い時に、離婚したくなる。しかし、離婚したら、子どもがかわいそうなだけでなく、歳をとった自分の今後の老後生活に保証がない。そのため、Cさんは婚姻生活で様々な不快なことを我慢して、家庭の全体的な利益だけでなく、自分の利益のためにも、子どもの将来を支え、自分を捧げている。

Dさんは結婚してから専業主婦をしており、夫のおかげで自分が働かずに済んでいたという。その後、「陪読」のために転居したDさんは暇な時間を埋めるために、鎮で仕事をするようになった。それに、せっかく鎮に移住したから仕事をする機会が出来たことにくわえ、夫の仕事が大変であることもあり、Dさんが家計を支えるために一役買いたいと考えたそうである。祝日になると、夫婦とも休みで一緒に農村部にある家に帰ることが多いという。

Fさんは「陪読」生活の中で暇を持て余すことを、ポジティブに思わないという。「『陪読』は簡単で、毎日料理、洗い物をするだけで、それほど時間がかからない」と語っている。Fさんは「『陪読』がしょうがないことで、自分が毎日『陪読』先で縛られているだけ」と話しており、「陪読」が終わった後には働きたいという願望を持っていると筆者に話した。家庭の経済状況を考えても、仕事をせざるを得ないという。

ここからは、夫と比較的頻繁に会っていたインフォーマントの代表的な話を取り上げて分析する。

Gさんは昔から夫とよく口喧嘩をしており離婚を何度も考え口にも出したが、夫婦喧嘩の原因は日常生活における些細なことで、実際に離婚するまでにはいたっていないと語っている。Gさんは二人が夫婦関係における最も基礎的な原則、つまり「相手に忠実すること」さえ守っていれば、離婚することはないと解釈している。Gさんは子どものことを考えないといけないし、離婚したら歳を取った自分の行先がどうなるかわからない。農村女性として老後の生活の保証が見つからない。若い時に家庭からの縛りが少ないため、離婚する可能性が高いが、老いてきた今の自分は仮に婚姻生活がそれほど幸せでなくても、離婚しない可能性が大きいという。

以上のような状況を踏まえた上で、インフォーマントたちは全体的に夫との関係が良好で、連絡を持つことで、そのような関係を維持することができ、夫婦間の睦まじい関係を営むことで個人と家族の利益を最大化しているということがわかった。その結果、Cさん

のように、婚姻生活は必ずしも本人の意志によって享受し追求するものではなく、ある意味で老後の自分の保証を獲得するために遂行していることも想像できよう。

多くの場合、妻のほうが完全に家庭の財産権を握っており、家庭の支出をコントロールしている。自分が子どもの世話とフレキシブル・ワークで疲れ切っているのに、夫のほうが麻雀をしているのを知ったら、インフォーマントたちは子どものことを口実に、夫にお金をせがんだりもする。夫が賭博をしないように夫に送金を要求する。彼女たちは子どものことに縛られながら、家族が子どもの未来に対して大きな期待を抱いていることを見通し、不本意でありながらも、子どものことを利用し、それを味方に、夫に送金を要求する特権を得ることができている。夫のほうは仮に手元にお金がなくとも、あらゆる手段を講じ、同僚や友達、周囲の人に借金をしてまでも、妻のリクエストに応えようとしている。インフォーマントたちは受動的な環境の中で能動的に各種のストラテジーを立て、家族の全体的な利益のために、自分が貢献していることを保留することなく積極的にアピールしている。

表面的には彼女たちはある程度「男は仕事、女は家事」のような近代家族的な家父長的価値体系の中に身を置いているが、しかし実際には彼女たちは自分の将来を運命に任せているばかりではなく、子どもの未来に期待しつつも、家族の子どもへの期待を見極め、子どもとの関係作りに重点を置くことで、家族全体の利益を高めると同時に自分の利益をも高めていると言える。時代に翻弄されるままではなく、インフォーマントたちは時代の波に乗り、その隙間に居場所をみつけている。

今回のインフォーマントたちが結婚生活がつらくても離婚しないと語る理由は、主に次の二つの点に要約できる。一つ目は、農村部で根強い伝統的な観念が、「陪読」先においても影響しているということである。「陪読」農村女性たちは農村を離れ、親族や宗族からの視線を避けることができたとしても、「陪読」農村女性のネットワークという新しいネットワークが浮上し、彼女たちはまたある意味で無形の目に監視されるようになり、依然として故郷の伝統規範に強く束縛されている。二つ目は個人化していく社会の中で、経済的な劣勢に引きずられ、「陪読」農村女性は夫婦間における依存関係がミドルクラスより強いことである。離婚の対価を夫も妻も支払えない。両親から独立し、社会的サポートも欠如しており、老後生活の保証の欠乏がゆえに、彼女たちには仮に夫が浮気しても見て見ぬふりをするだろうという思いがある。社会福祉が遅れている農村地域では、「家族に関わる強固な規範が残っており、それが女性の個人化と衝突している可能性がある」（宍戸 2018: 123）。インフォーマントたちは夫に経済的に深く依存しており、子どものためにも、家族を円満であるように経営している。経済的な自立条件が乏しく、農村部の伝統規

範に相変わらず縛られているため、農村女性たちは「陪読」先で新たな主体性や自立性を獲得することが難しい。

4-4 「陪読」期間中の仕事状況：家計の足しとしてのフレキシブルワーク

「陪読」農村女性と言っても、実は彼女たちの家庭の経済的状況には大きな差がみられる。家計が厳しい場合に、彼女たちはフレキシブル・ワークを持っていることが多い。彼女たちに開かれた仕事の種類はきわめて限られている。デパートやホテルの清掃員、薬局の店員などの職種が彼女たちの一般的な選択肢である。

A さんは息子が中学生のころに学校の食堂で働いていたが、息子が高校生になると働くのを辞めた。

C さんはデパートの清掃員としての仕事に携わっており、最初の段階では月に 1,600 元（約 3 万 2 千円）の給料をもらっていた。その後、給料が月に 2,500 元（約 5 万円）に上がったが、清掃員としての仕事をやめたいと C さんは依然として強く思っている。だが、多くの苦労を乗り越えた後、せっかく給料が 2,500 元（約 5 万円）に上がったほか、清掃員のように時間的な自由度が高く、子どもの世話と両立できる他の仕事を探すのが困難であるため、C さんはなかなか清掃員としての仕事をやめられずにいる。

> 私は毎日くたくたに疲れる。夫に電話して、向こうが麻雀をやっていたら、私はすごくむかつく。私が子どもの世話をしないといけないと同時に仕事もしないといけないのに、彼が麻雀をやっている。それを知ったら、私は心の中にある怒りや詰まった不満をすべて彼に当たり散らしてしまう。そして、いろんな口実を探して、お金がないからと彼に送金を要求する（2022 年 5 月 16 日）。

C さんの夫はそれ以来、C さんの気持ちを思いやり、C さんに麻雀をしていることは内緒にするようになった。家族のために必死で働きながら、子どもの世話を一から十まですべてやり遂げなければいけない C さんは、夫が麻雀をすることが許せない。汗をかいて稼いだお金をギャンブルで簡単に失うからである。その分のお金を家に送金してほしいと話していた。

D さんも「陪読」してからはじめて仕事をするようになった。月に 600 元（約 12,000 円）～ 700 元（約 14,000 円）の給料だそうである。

> 私たちもすごく文句を言うよ。あんなに働いているのに、これくらいの給料しかもら

えない。だから、みんな働きたくない。たまに仕事をサボって、山奥へ野生の果物を取りに行ったりする。でも、暇潰しに、仕事がある時には一応仕事をやっている。最近はコロナ禍の影響で、あまり仕事できていないけど（2022 年 5 月 27 日）。

D さんが仕事してからはじめてわかったことは、彼女のような人にとって、時間を一番有意義に使う術は子どもに使うことであるという。長時間働いてもわずかな給料しか手に入れることができないため、子どものために時間を費やすほうがましかもしれないと D さんは話していた。しかしながら、D さんが子どものためにできることは生活面における世話に限られていたため、それほど時間がかかるものではなかったという。それゆえ、D さんも今でも仕事をやめずにいる。

H さんも「陪読」以降、ずっとスーパーで働いている。夫は失業に追い込まれ、H さんと一緒に都市部に移住してきたが、その後は、仕事があったりなかったりしており、ずっと不安定な状態である。H さんは仕事がシフト制のために家のこともできることをポジティブに考え、働き先を変えながらスーパーでの仕事を 10 数年も続けてきた。

インフォーマントたちは家庭の経済状況を踏まえながら、フレキシブル・ワークをするか否かを決定することが多い。彼女たちは仕事を楽しんでいるわけでもないし、ただ暇潰しや家計の足しに、そういったような仕事に携わっている。フレキシブル・ワークを持っていないインフォーマントもおり、彼女たちは自分が労働市場に進出してもよく報われないことを承知の上で、やらないことにしている。

E さん：私は子どものために「陪読」を始めたから、子どものことに専念したかった。わずかの 4 ヶ月の「陪読」生活だし、いい仕事がないし、仕事をしたくなかった（2022 年 5 月 28 日）。

F さん：子どもが将来いい仕事に就けるように、私は今子どものことに専念している。いい仕事がないから、暇な時にはスマホをいじったりして仕事をせずに過ごしてきた（2022 年 5 月 28 日）。

G さん：私たち「陪読」農村女性はだいたい学歴が低いから、いい仕事が見つからない。だから、私は一層のこと子どものことに専念して、子どもが将来いい仕事を持つように子どものことを支えている（2022 年 5 月 28 日）。

H さん：仕事はしていない。「陪読」前にも仕事をしていなかった。仕事より子どものために時間を費やすほうが有益だから（2022 年 6 月 7 日）。

家庭の経済状況がそこそこで、フレキシブル・ワークをしない人はまだフレキシブル・ワークをやらねばならない状況には追い込まれていないという状況もある。たとえば、Eさんは夫が政府の機関で働いており、インフォーマントの中でも比較的富裕である。彼女がフレキシブル・ワークをしなくても、夫が一家の家計をまかなうことができる。

Eさん、Fさん、Gさん、Hさんは働きたくても良い仕事に就けないうえに低い給料しかもらえないと思ったため、「陪読」期間中にフレキシブル・ワークを持っていなかった(持っていない)。

社会的・経済的活動の中で不利な位置に置かれ、経済的に余裕がないほど、「陪読」農村女性はフレキシブル・ワークをしないといけなくなる。子どもの教育面で果たせる役割が非常に限られていながら、育児責任・稼得責任という二重責任が同時にフレキシブル・ワークを持っているインフォーマントたちに重くのしかかっている。フレキシブル・ワークをしている人は子どもの世話に差し支えのない仕事を選択している。フレキシブル・ワークを持っているか否かに関係なく、すべてのインフォーマントたちが「陪読」期間中にいつも子どものことを優先していることがわかった。

4-5 「Uターン」の「陪読」

「陪読」後にHさん以外のインフォーマントたちは全員夫の実家に戻った(戻る)という。戻るほうの人々は都市に持ち家がなく家族が夫の実家にいるため、村に戻った(戻る)わけである。Hさんだけは今でも都市部に住み続けている。彼女にその理由を尋ねた。

Hさん：末子が大学に入ってからも今のところに住み続けている。
筆者：もう村に戻らないつもりでしょうか？
Hさん：もう戻らない。少なくとも働けなくなるまでは戻らない。戻ってもやることもないし、村の女たちは人のことを勝手にあれこれ議論するから、そんなのが大嫌いだ(2022年6月6日)。

Hさんは義理の両親が早くに他界してしまったため、村には特に親しい親戚がいない。夫はすでに定年になり、退職金を受けられるようになった。夫婦二人は個人のスペースが十分に提供されている都市で、より充実した、精神的にも楽な暮らしをしたいという。

Hさんは新型コロナの影響で、約15日間の自宅での隔離を経験した。この隔離を通じてHさんは労働の必要性を筆者に語った。農村では仕事を見つけることが困難であることにくわえ、人々は時間を無駄にしがちでプライバシーをゴシップすることで暇をつぶし

ているという。それに対して、都市では労働で自分の価値を創造するチャンスが多いとHさんは農村に戻らない理由を列挙している。

都市では個人としてのスペースが保証され個々人のプライバシーが尊重されているのに対して、農村ではプライバシーの意識が淡薄でゴシップ好きな人が多いということをHさんは都市部に移住してから改めて感じたという。そこで、Hさんは十分に健康であり都市部に住んでいられる限りは戻らないという。

Gさんも都市部ではプライバシーが尊重されており、ゴシップされないというところを語っている。

> 夫の実家に帰ったら、いろんな噂がまた私の耳に入るようになった。農村では人が暇だったら集まってゴシップするのが好きみたいだが、私はゴシップするという行為自体があまり好きではない。都市部の人々は互いに距離を置いて暮らしている感じがする。都市部にいると、プライバシーがあまりゴシップされないが、人と人の繋がりが弱い（2022年5月28日）。

Hさんはプライバシーが尊重されるという都市部のメリットに引きつけられていることにくわえ、夫の実家に親しい家族がいないため都市部に住み続けているが、Gさんは夫の実家に家族がいるため、農村に帰ることを躊躇なく決めたという。都市部ではさまざまなメリットがあるかもしれないが、自分の居場所がないとGさんは語っている。他のインフォーマントたちからもGさんと似たような話をうかがえた。

> Aさん：都市部にいると、子どもがいい教育に恵まれると思うが、私自身はやはり農村部での生活に慣れている。子どもの教育のためでないと、都市部で家を買いたくない（2022年5月14日）。

ほとんどのインフォーマントたちは都市部で帰属感を感じられず、夫の実家に帰り家族との繋がりを取り戻したいと語っている。彼女たちのほとんどは都市部のプライバシーが尊重されるところには引きつけられているが、低学歴で農村出身の自分の居場所ではないため都市部に長く住み続けられないと語っている。

5　考察および結論

海外教育移住に同伴する母親に関する先行研究では、女性に主体性、自立性、自己決定の正当性が与えられていることが指摘されているが（Chiang 2004,2008; Waters 2002; Yeoh and Huang 2005）、階層や地域格差の視点が欠落しており、経済資本・文化資本・社会資本の劣った女性の状況は不明のままである。

そこで、筆者はこれまで中国国内・地域内における教育移住に同伴する母親の移住経験に焦点をあて、経済的にそれほど豊かではない女性の状況への分析を試みてきた。8名の調査協力者の語りから（1）国内教育移住に同伴する母親はどのような状況下でエンパワーされたり、ディスエンパワーされたりするのか（2）国内教育移住は伝統的な性別役割を強化するのか、それとも女性に「男主女従」というような従属的な性別役割から解放される機会を提供するのか、を分析してきた。「陪読」農村女性といっても彼女たちはけっして一枚岩ではないということがわかった。本研究では、2つのリサーチ・クェスチョンに対して以下のような結論が得られた。

5-1 「陪読」は農村女性にとってのエンパワーメントか

海外への教育移住がアジア家庭に与えた権力分配の変化の結果として女性の地位の低下または上昇につながるか否かについての研究はなされてきた。オーストラリアの文脈におけるこの質問への答えは、R. Madden and S. Young（1993）によって要約されている。伝統文化からの分離、移住プロセスそのもの自体から生じたプレッシャーや新しい文化環境への融合はすべて、教育移住を行う家庭内における大きな変化をもたらした（Madden and Young 1993）。最も明らかにされた変化は、女性の労働市場への参入や家庭内における責任の増加に起因するジェンダー役割の変化である（Madden and Young 1993）。そのよう変化は男性と女性が家庭生活を営む方法を変える原動力につながっている（Madden and Young 1993）。しばしば不利に苦しむにもかかわらず、アジア女性は教育移住をきっかけに、それらの変化の多くを自分にとってのメリットに転じるという証拠がある（Madden and Young 1993）。Chiang（2004）はオーストラレーシアの文脈におけるアジア教育移住家族でのジェンダー役割の変化を指摘している。Chiang（2004）はオーストラレーシアに教育移住したアジア女性へのインタビュー調査を通して、家を率いていた「宇宙飛行士」の夫がいなくなったため、海外教育移住の結果、妻はホスト社会で自律的で自主的なアクターになったという結論を導いた。また、カナダにおいても、Chiang（2008）は海外教育移住した台湾女性は、あらゆる状況でストイックかつ忍耐強い姿を見せている

と分析した。移住先で運転を学ぶ、新しい言語を習得する、冬に雪かきをする、宗教団体でボランティア活動をする、夫が訪れてくるのよりも頻繁に夫に会いに行く、幼い子どもの世話をする、子どもを数学やピアノ、語学などのクラスに連れて行く、週末に中国語を教えるといったことを彼女たちはすべて一人の力でやり遂げている（Chiang 2008）。一方で、教育移住は確かに妻を夫によりいっそう経済的に依存させている（Chiang 2004,2008; Waters 2002; Yeoh and Huang 2005）。他方、海外への教育移住はアジア女性に自主性、自律性、自己決定の正当性をも与えていることが指摘されている（Chiang 2004,2008; Waters 2002; Yeoh and Huang 2005）。

海外へ移住するアジア女性が自主性を持ち始めるのに対して、農村部から都市部へ一時移転する農村女性は新しい個人の発展を実現することがほとんどできない。都市部で就職できても、長時間続けるような職種ではないため、彼女たちは都市部でのフレキシブル・ワークを一時的な仕事としてしかみなしておらず、「陪読」し終わったら、実家に帰ることが圧倒的に多い。しかも、それを当然のことに思い、「陪読」の最初から最後まで、彼女たちは子どもがいい大学に受かり、自分が実家に帰ることを常に意識し、その軌道から外れることはほとんどない。G さんには舅姑がいないうえに、夫と子どもたちと一緒に都市部に移転しているため、今でも「陪読」先に住んでいるが、彼女のケースは例外的である。農村女性の中では最終的に実家・地域へ帰るなどの往還型の移動が一般的である。「陪読」期間中に多くの場合、妻のほうが完全に家庭の財産権を握っており、家庭の支出をコントロールしているが、それが実質的なエンパワーメントにつながることは困難であった。「陪読」が終わってから農村女性は農村部に戻り、夫か息子に頼るようになるしかない。したがって「陪読」は母親にとっての実質的なエンパワーメントとは言い難い。

5-2 「陪読」は農村女性にとっての解放か

「母親の達成が子どもの教育にある」という信念は、儒教的価値観の重要な側面として、今日の海外へ教育移住する家族にも当てはまると分析されたが（Yeoh and Huang 2005）、今回のインフォーマントの間では、母親とは無関係に、子どもの学業実現度合いは子ども自身の資質と努力によるものだと「陪読」前に信じていた人が少なからずいた。先述のように、B さんは前には子どもの学業に関心をまったく向けておらず、稼得役割を自分の一番の役割として果たしていた。G さんは夫が失業したこともあって、都市部で就職機会が開かれるようになると予測し、都市部に移住し、調査当時まで住み続けてきた。H さんは最初未子の息子に「陪読」を求められ、それを断固として拒んだが、隣人と家族に説得され、最初は乗り気でなかったものの、「陪読」に乗り切ったのである。

実のところ、今回のインフォーマントの一部は、最初はそれほど「陪読」に積極的ではなかった。子どもの学業達成や人生成就は子ども自身による部分が多く、自律、自覚、忍耐力といったような性質を子ども自身が培養し、堅持するべきで、それらの良い素質を子ども自身が持てば、学業における母親の存在は必要ではないとの観点が頻繁に出てくる。本稿のインフォーマントたちは、母親として「陪読」することを重要視する人もいれば、自分自身の文化資本の欠乏を意識しており、「陪読」の実際の効果が微弱であると自覚している人も存在する。後者のような女性たちは、周囲からの語りに影響を受け、「母親としては子どもに求められたら、なにしろ『陪読』すべきだ」と思うようになり、理想的な「母親」になっているところが見られる。

そのため、「陪読」は女性を伝統的で従属的な役割から解放するのではなく、「子どもの世話は女性の第一の用務だ」、「子どもの世話は母親がすべきだ」、「女性にとって稼得役割より育児役割が重要だ」という伝統的な規範を強化したといえる。

5-3　中国農村社会の制度的特徴と女性役割の変化

移住先での生活がより自由で多彩であるにもかかわらず「陪読」後に農村部に戻る女性が圧倒的に多いことは一見矛盾するように見えるが、その理由は中国農村社会における戸籍制度や福祉制度の特徴に見出せる。

中国農村部ではジェンダー面における資源配分の構造的な不平等が存在する。たとえば、多くの農村地域で女性は両親から男性と平等に財産を相続することができない（金 2016）。家庭が生活の共同体である現状および、家庭を資源配分や社会福祉の単位とする社会システム（世帯単位の福祉住宅割り当て制度、世帯単位の最低生活保障など）は、多くの場合、家庭内における個々人の権利の不平等を覆い隠している（金 2016）。女性、特に農村部の女性が「婚姻の保障」、つまり離婚や死別で世帯主の夫を失うと、土地や家を持たずに貧困に陥る可能性が非常に高くなる（金 2016）。したがって、農村部の女性は家庭のなかで従属的な地位に置かれがちで、夫に依存してからはじめて居場所ができるような存在である。そのため、「陪読」農村女性は移住先での自由な生活を享受しても、「陪読」が終わった後に躊躇なく一斉に農村部にいる家族のところに戻る。農村部に戻らない G さんは夫などの家族と一緒に移住先に住んでおり、夫に依頼している側面は見落とせない。

女性が子どものために仕事をやめ「陪読」を選んだ理由、または子どもが生まれてからずっと子どもの世話をしてきた理由は現代中国農村部の家庭における親密関係の特徴や孝文化の内実の変化に起因する。

1949 年新中国が成立し、社会主義建設が始まった。社会主義建設期においては、集団保

育や公共食堂などの公的機関が設置され、女性が男性と同じように農村部で働くことが可能になったが、1978 年改革開放以降に国家による急速な市場経済化のプロセスにより、農村部の女性は都市部に出稼ぎに行くようになった。21 世紀に入ってから、知識密集型の産業が勃興し、産業構造の転換で出稼ぎに行っている女性は都市部に居場所を失い始め、一部の人は仕事をやめ子どもの世話を生活の中心とする選択肢を選ぶようになった。

計画経済から市場経済への移行の中で、国家は社会的給付や支援の提供を削減し、これまで地方の集団や都市単位が提供していた福祉支援から個人を切り離す一方で、従来の福祉支援を代替可能な新たな福祉支援を打ち出していない（閻 2017）。また、「城郷二元論」[1]による教育資源や福祉資源などの各種の資源の配分は都市部と農村部においてきわめ不均衡である。福祉支援の削減が都市部と農村部における各種の資源の不均衡な配分とあいまって、農村部でますます孤立になった個人にとって家庭が個人の保護、帰属、人生の意味の唯一の源となっている（閻 2017）。その結果、農村部の家庭は特に家庭の未来の希望を孫の世代に託すようになる。閻雲翔（2017）は、「個人化」しつつある現代中国社会で孝文化への再定義が生じていると指摘している。具体的には、若い世代から上の世代への盲目的な従順からの変化が起きているのだという（閻 2017）。つまり、今日の孝文化の内実はむしろ、年老いた親が成人した子どもからの精神的なケアや物質的な支援などと引き換えに、かつての家庭内における身分的優位性を放棄することになることである（閻 2017）。西洋における自分だけの幸福を追求し、自分のために生きる「個人化」とは異なり、中国における「個人化」は世代間の平等より世代間の団結を強調することを意味する（閻 2017）。「陪読」という現象からいえば、農村部に残る義理の両親などの親族は移住先に食料品を送ったり、インフォーマントたちの夫の世話をしたりすることを通して「陪読」ママの「陪読」生活、孫の世代の未来を支えようとしていることがその具体的な現れとして考えられる。また、夫は外で主な稼ぎ役割を担い、妻は主に家庭内における子どもの世話に専念すると同時に、家庭の経済状況に応じて子どもの世話に差し支えのない範囲内でフレキシブル・ワークをしたりしなかったりして家庭の全体的な利益を高めようとしている。

現代中国の農村社会の文脈においては、世代間の団結は家族全員から孫の世代への支援として現れている。つまり、祖父母、父母などの家族成員は全員最孫の世代の教育に力を捧げている。子どもの成功に対する期待、子ども中心の家族関係、多世代家族といった現象は農村家庭が「リスク社会」に対応する方法として理解できる。また、階層昇進という

---

[1]「城郷二元論」とは、都市と農村の二元構造体制をさし、中国の経済と社会発展に存在する深刻な障害であり、主に都市と農村の間の戸籍障壁、2 つの異なる資源配置制度、および都市と農村の戸籍障壁に基づく他の問題として表現されている。

動機が家庭内におけるジェンダー役割分担を強化させ、女性を「自己犠牲式」の「陪読」行為に追い込み、家事育児を担わせるようになる。現代中国の農村家庭における階層上昇という動機が家庭内における女性の社会進出を犠牲に、家事育児を女性の第一用務に規定しつつある。

参考文献

Chee, M., 2005, *Taiwanese American Transnational Families: Women and Kin Work*, New York: Routledge.

Chiang, N.L.H., 2004, "Middle-class Taiwanese Immigrant Women Adapt to Life in Australasia: Case Studies from Transnational Households," *Asian Journal for Women Studies* 10（4）: 31-57.

————, 2008, " 'Astronaut Families' : Transnational Lives of Middle-class Taiwanese Married Women in Canada," *Social & Cultural Geography* 9（5）: 505-18.

韓斯琴, 2019,「『陪読』対『陪読』幼児的情緒、情感与交往意識等方面的影響」『佳木職業学院学報』（4）: 123-5.

Ho, E.S., R. Bedford, and J. Goodwin, 1997, *Linking Migrants into Their Family Contexts: Methodological Considerations*. Hamilton, New Zealand: University of Waikato, Population Studies Centre.

Jeon, H., 2008, Negotiating Subjectivities of Korean Astronaut Mothers in New Zealand: the Experience of Astronaut Family, Gender and Ethnicity, S. Tse, A. Sobrun-Maharaj, S. Garg, M. E. Hoque and Y. Ratnasabapathy eds., *Building Healthy Communities. Proceedings of the Third International Asian Health and Wellbeing Conference*, Auckland, New Zealand: University of Auckland, 162-70.

金一虹，2016,「婦女貧困的深層机制探討」『婦女研究論叢』2016（6）: 10-2.

李暁紅，2022,「農村『陪読』家庭親子衝突剖析与社会工作介入――以家庭系統理論為視覚角」『河西学院学報』38（1）: 112-6.

Madden, R. and S. Young, 1993, *Women and Men Immigrating to Australia: The Characteristics and Immigration Decisions,* Canberra: Australian Government Publishing Service.

宍戸邦章，2018,「東アジアにおける家族主義と個人――EASS 2006 家族モジュールに基づく日韓中台の比較」『家族社会学研究』30（1）: 121-34.

唐佳・梁謹恋・穆麗浮，2017,「社会性別視角下陪読対農村婦人的影響――以四川省濾州市 B 鎮為例」『中華女子学院学報』5: 52-8.

Waters, J. L., 2002, "Flexible Families? 'Astronaut' Households and the Experiences of Lone Mothers in Vancouver, British Columbia," *Social & Cultural Geography,* 3（2）: 117-34.

閻雲翔，2017,「社会自我主義：中国式親密関係――中国北方農村的代際親密関係与下行式家庭主義」『探索与争鳴』2017（7）: 4-15.

楊永霞，2019,「家長『陪読』与小学生自尊自我効能感養成的関係研究」『科技資訊』17（34）: 148-50.

Yeoh, B. S. A. and Huang, S., 2005, "Transnational Families and Their Children's Education: China's 'Study Mothers' in Singapore," *Global Networks*, 5（4）: 379-400.

（てい・い　博士後期課程）